

岡地文子全集

第十卷

817

田
地
文
子
全
集

第
十
卷

新 潮 社

第十四回配本(全十六巻)

円地文子全集 第十巻

定価三三〇〇円

昭和五十三年十月二十日 発行
昭和五十四年十月三十日 二刷

著者 円地文子 © Funiko Enchi, Printed in Japan 1978.

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一

編集部 東京(〇三)二六六一五四一一

振替 東京四一八〇八番

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

円地文字全集 第十卷 目次

女
千
姬
春
秋
記
帶

解
題

455 313 7

円地文子全集 第十卷

女 帯

雪の下の花

お汲は叔母の幾野のうしろについて、蓮華寺の石段を登って行った。自然石の急な石段の上に古い山門があつて、その傍に銀杏の大木が鮮やかな緑に鳥形の若葉を飾つていた。

信州飯田の道具屋の娘に生れたお汲は高遠藩勘定方の侍である母方の叔父、岡部四郎五郎の家へつい二ヶ月ほど前から厄介になつてゐる。お汲の母が早く死んで継母に弟妹が多いので、何かにつけてお汲の冷たく扱われるのを哀れがった四郎五郎夫婦の計らひだったが、同じ山国といつても能楽や茶事、踊りなど遊芸ごとの盛んな飯田の町住いから、高遠の小身な武家の家に来てみると、十七歳のお汲には暮しのつましき以上に窮屈で氣のつますることも多いのである。

今日は叔母が墓參の供に連れて行くといふので、お汲は久しぶりに組屋敷の外へ出られるのがうれしくて、いそいそ従つて来た。

「おやどなたかご參詣があると見える」

幾野は山門を潜つたところで立ちどまつてお汲の方をみた。日蓮宗の寺なので、七面堂が門のすぐ近くにあつて、木連格子に願掛けに切つたらしい女の髪がいくつか結び下つてゐる。五月雨どきのうす曇つた空の下に黒い髪の下つてゐる堂の様子が若いお汲には何となく陰気に氣味悪く感じられたが、叔母の指さす方を見ると広い境内の奥の本堂の近くに駕籠が一挺降りていて、中間が二人その近くの石に腰を降ろしてゐた。本堂の縁にも侍らしい男が供待ちしているのが見えた。

駕籠は飾りのない質素なものだが、付き人のあるのは身分のある人の參詣であろうとお汲は思った。「ちよつとあの中間衆にきいて来るからね。お前はここに

待っておいで」

と言つて、幾野は一人で本堂の方へ歩いて行つたが、やがて駕籠近くに立つたまま、小手招きして、お波を呼んだ。「大丈夫ですか。お詣りしても叱られませんの」

とお波がいうのに、幾野は仔細ないという風にうなずいて見せてから、草履をぬぎ捨てて、厚い茅葺屋根の本堂へ上つて行つた。

二人は御本尊の前に額づいて、賽銭を上げた。幾野は南無妙法蓮華經と熱心に唱えて手首にかけた数珠を押しもんではおがんでいる。お波も叔母の真似をしてお題目を唱えてみたが、幾野のように熱心にはなれないので形ばかり殊勝げにうつむいていると、

「お供の衆、絵島どのがお帰りなされるぞ」

と老いた声で呼ぶのが聞えた。

供待ちしていた侍が立上つて、本堂を降りて行く様子である。

「方丈さまがおいでのになる」

と言つて幾野は居住いを直した。日成和尚は香染めの法衣を着た無造作な歩き方で客座敷の方から、客を案内して出て来た。七十を越えているはずだが、筋骨の逞しい古武士のような風格の老僧である。

「これからは雨の多い季節ゆえ別して身体に気をつけられるがよろしい……」

と和尚は客に話している。上司の武家かと思つたのに、客は意外に女であつた。お波の眼にはまだ四十になつたかならないぐらいの年にみえたが、眉も払つていず、着ているものも色の分らないほど地味であつた。

「毎年、これからの季節には足にむくみが来まして、難渋いたします。当地に参りまして以来の身体癖でございます」

女の声は低いが澄んでよく通つた。背から腰のあたりの攪み方に何となく老年が感じられるが、細面の華奢な輪郭に、切れ長の眼の涼しく冴えて見えるのが、お波にはいつぞや飯田の芝居で見た江戸役者の何とやらという美しい女形の舞台顔にそっくり似て見えた。

「星逢いのころまでは参詣もなり兼ねますゆえ、いつぞや写させて頂きました提婆達多品を朝夕誦すのを日課にいたします」

「いやいや、お気が向いたらいつでもお出かけなされ。又、盤の上で戦いまししょうぞ」

和尚の枯れた大声の笑いに女客は微笑んでから、丁寧に会釈して、階段を降りて行つた。その歩み方も静かな中にきりりと引きしまつて美しかった。

和尚は本堂の縁に立つたまま見送っている。殿さまの御親類や御家老の奥さまなどにしては衣類が貧しすぎるし、お住持が下まで降りて行かないのもおかしい。一体どうい

う身分の人なのだろうとお汲は老婦人に対して好奇心をわかせた。

「絵島さまは碁をなされますか」

日成和尚と挨拶したあとで、幾野がたずねた。

「女にしてはなかなか強い……わしはいつも二目置いて、まだ敗けが込むのじゃ」

と和尚は笑いながら言った。

「絵島さまというのはどういいうお方です」

お汲は墓参りをすませて、寺の石段を降りながら、叔母にきいてみたが、幾野はお汲の問いかけがきこえないように銀杏の梢を見上げて、

「大きな樹だろう。四、五百年は経っているよ」

と言った。

その晩食事の膳にすわっている時、四郎五郎は飯茶碗をお汲にさし出しながら、

「今日は叔母さんの墓参りの供をしたそうだな」

と言った。

「はい」

「蓮華寺はいいお寺だろう。撰津の富田とんだからお国替えになつたのはもう三十年近い前だが、御先祖の墓を見捨てるのが、何より辛かった……しかしここへ来てみたら、うちの御宗旨の日蓮宗の寺が思いの外近くにあつてやれやれと思つたものだよ」

四郎五郎は川魚の乾した煮つけをかたそうに噛みながら、話している。内藤藩の国替えで海の近い関西からこの山国へ移つて来て、生きのよい海水魚の味に恋人のようにあくがれて暮した若い日のことが何となく心に浮んで来た。

「方丈さまにもお目にかかりました。もう大分なお年でしように、いつもお元氣な方ですね」

「そう、もう八十に近いお年だろうな。仏法の修業で鍛えた身体というものは武芸の達人と同じことで年とっても軟やわにはならぬものだ。相変らず、大きい声で何かいっておられたか」

「それからあの、絵島さまというお方が御参詣でございました」

お汲は叔母の説明してくれないあの由緒ありげな老女に好奇心を惹かれていたのできいてみた。

「そうか、絵島どのが……また御上人と碁を打っていられたかな」

四郎五郎は幾野の方へきいた。

「そうのようでした。絵島さまは方丈さまより、碁がお強いそうでございますね」

「そうだろうよ。碁ばかりではない。法華經の御講釈など聴聞しても、難所を問まひ詰める問まひに男子も及ばぬ鋭さがある。深く学問したというでもないに珍しい才女じゃと、いつかお上人が話していられたことがある……」

「絵島さまというのとは一体どういう身分の方でございますか」

とお汲はきいた。

「絵島どのか……ああ、お汲はまだ高遠へ来て間もないから、知らないだらうなあ」

幾野は夫がつまらぬことを若い娘のお汲にきかせはしまいかと、額に薄く皺をよせていたが、四郎五郎はこたわっている様子もない。

「絵島どのの昔、千代田城の大奥に勤めて、大年寄という重いお役を持っていた奥女中だよ。お前にはわかるまいが、大年寄というと、大奥に千人からいる総女中の取締りをする束ね役で、お高は六百石だが、格式は十萬石以上のお大名というところだ」

「そんな偉い方がどうして、こんな山奥へ来ていらっしやるのでございますか」
とお汲はきいた。

四郎五郎は幾野と眼を見合せてから静かに言った。

「それは絵島さまが罪になるようなことをしたからだ。本来なら、死罪か遠い島へ流されるはずが、多年の御奉公の功に免じてここの殿さまにながのお預けということになった……恰度お国替えでここへ移って来た年のことだ。先々殿さまがお亡くなりになる……絵島どのの受取りに行く、家中一統、てんやわんやに騒動したものだ。もう三十年近

い昔になるなあ」

「そうだったそうですね。私はその次の年に飯田から嫁かたづて来ましたから、その話はお姑おぢさまからうかがっただけですけれども……」

幾野も夫の言葉に誘い出されて、いつか昔を偲おもふ眼まなこざしになっていった。

「お預けのはじめのころは城下に置いてもいいけないという厳ごしいお触れで、ここから一里ばかり離れた非持村の火打ひうち平ひらというところに囲い屋敷をつくってそこに置いたのだが、何ぶん辺鄙な土地で、番の役人衆や女中どもも迷惑するので、六、七年経ってから搦め手御門から五町ばかり向うの花畑へ移したのだ」

「非持村で、絵島さまが病氣された時に、診察に出張した本道ほんみち（内科医）の佐久間玄石さくまげんせきどのはあちで雪に降りこめられてお城下へ帰れなくなって、困ったといつか話しておいででした」

幾野は食器を片づけながら、言った。罪のある人で流しもの同然だというのに、屋敷を作ったり、女中や役人をつけたり、身分の高い人というのは随分他人に迷惑をかけるものだとお汲は思った。それにしても、その絵島殿という人は一体どういう罪で山流しになったのだらう。ここへ流されて来たのが三十年近い前だというし、その前江戸の大奥で重い役を勤めていたといえ、先刻蓮華寺で見た絵島

の年はもう六十近いに違いない。

そう思つて見れば、老女らしい弱りが何となく足腰の動きに見えていたようにも思えるが、顔色の白さも髪の色も、眼の前で茶碗や箸を片よせている四十代の幾野とは較べにならないほど若く、美しく眺められた。

「一体絵島さまはどんな悪いことをなさつたのでしょうか。身分の高い女の人が死罪にもなりかねないような罪を犯すなんて、どんなことなのかしら……私には見当もつきませぬわ」

「そんなことはお波のような年のものはまだ知らない方がいいんだよ」

と幾野はたしなめるように言ったが、四郎五郎は何げなく笑つた。

「そういつまで子供扱いにされてはお波も不服だな。それ、頬がふくらんで来たじゃないか」

「でも、あなた」

「別に隠し立てすることもあるまいて……もう三十年も昔の話だ。絵島どのは、正月、芝の増上寺へ月光院さまの御代参に奥女中大勢を連れて出かけた帰りに、木挽町の山村座という芝居を見物に行ったのだ」

「まあ、お芝居を……」

とお波は眼を見張つて言った。飯田にいた時分、城下のお祭りの時、江戸役者の一行が旅まわりして来たのを唯一

度見たことがあつたが、お波はその中の一人の若衆方の役者をこの世ではじめて見た美しい男として心に宿していた。

「お城女中の芝居見物はお上の御法度になつてゐるのに、華々しい風俗の女中衆が大勢、棧敷に居並んだので、座方も気にして前に簾をかけた。それでも何となく普通の人が見物しているのとは違う様子が御簾の外に洩れるので、見物も舞台をみる間々に、棧敷の方へばかり眼をやつていた。ところが悪いことは出来ないもので、絵島どのの前の銚子が転んだのから酒がこぼれて、下棧敷にいた薩摩藩の侍夫婦の鬘や衣類に、酒がかかったのだ。気の早い薩州もこのことでひどく立腹して、絵島どのに詫びごとせいといふ……絵島どのは強情にわびぬので、居合せた御徒目附の岡本という御人が薩州の武家に謝つてその場はすませたが、その後薩州から届出があつて、御禁制を破つて芝居見物し、よからぬものときあつたというので、絵島どの以下大勢が罪に落ちることになつたのだ」

「まあ、そのくらいのこと、三十年もこんな山国に流されるのですか。大奥のお勤めなんて、恐ろしいものですね」

お波は小さな肩をすくめ怖そうに言った。四郎五郎はにやりと笑つて、

「ところがな、お波……大人の世界の話には裏というものがある。絵島どのの話にも裏があるのだ」

と言った。

旧暦の五月と言っても、高遠の気候ではようやく桜が散って、山吹が咲きかかるころである。夏でも夜は冷えて布団を重ねたくなる土地であるから、三人が食事をすませて、幾野とお汲は夜なべの針仕事に行灯の下にかがみこみ、四郎五郎が川釣りの棹の手入れをはじめるところには、油じみた勝手の障子に山おろしの風が松の枯葉を吹きつける声が淋しく聞えて、袷の衿もとがうすら寒く感じられた。

「叔父さま、絵島さまの芝居見物には裏があるとおっしゃったのはどういふことですか」

「ごわごわ糊のきいた紺緋の袖を身ごろに縫いつけながら、お汲は四郎五郎にきいた。

「うん、それはつまりな。絵島さまが御法度を破って、芝居見物をした、いや役者を買ったというのは、そりゃ満更嘘でもなかったろうが、そんなことだけで大年寄ほどの重いお役の奥女中が罪になることはないのだ。そういう罪の名目をこしらえたのは上べのことで、実はその当時の御老中方が大奥の勢力が強くて、手のつけられないのを、どこかでぴしりと押えつけようと機を狙っていた。つまりは網を張っていたのに絵島どのが芝居見物でまんまと引っかかってしまったようなものだよ。いくら才女と言っても女は女で、男のように真の味方というものがないから、男が大勢かかって考えた網には易々ひっかかるのだ。女賢しゅう

して牛を売り損うとはこのことかも知れない。しかしさすがは絵島どのも、大年寄ほどの人だけあって、召捕られて調べられた時にも芝居見物のことは認めたが、役者といかがわしいことがあったとか、或いは御主人の月光院さまに御迷惑のかかるようなことは何一つ白状せなんだという……それに当地へ配流になってからの行状をみて、まことに行儀正しく何一つ非の打ちどころはない。それゆえ代代の殿さまも殊の外感心遊ばされて、今では罪人とは言うものの、厳しい掟など立ててはおられぬのだ」

「それだからこそ、ああして折々は供をつれて、御仏参にも行かれるのだよ。人のうわさには絵島どのには月光院さまのお身持ちを庇って、罪に墜ちた忠義ものだともいふほどなのだよ」

と幾野は教えるように言った。俳優との恋愛で罪に問われた女として絵島を見させたくない念が、高遠藩の女子教育として幾野にも伝えられている。

「絵島さま達がそんな重いお仕置きを受けるようでは芝居の人達の方にもお咎めがあったのでしうか」

とお汲はきいた。

「あつたどころではないさ」
四郎五郎は釣棹に糸をつけて、手心を試しに振って見ながら言った。

「その時のお調べでは拷問にあって死んだ芝居者さえあつ

たぐらう、島流しやら重追放やら科人かじんが沢山出た上に、木挽町の山村座はお取りつぶしになってしまった……絵島どのの相手をした生島新五郎という丹前役者は三宅島に流されて……死んだという噂はきかないから、多分まだ生きてるんだらうなあ。歌舞伎役者が御殿女中のお座敷へ出るのが厳禁になったのも絵島どのの騒動以来だよ」

「絵島さまもお気の毒と言えばお気の毒だけれども、相手の役者は飛んだばかり合いになったものですね」

幾野は縫いもの手を上げて、針を髪かみの毛けに潜ひそませながら言った。

「お上のことというのは兎角うまかど、下しもの方かたへ強ちやうく当あって来るものだ」

と四郎五郎は言った。

「三十年なんて長い月日、島流しになっているなんて……ちょっと考えても恐ろしくなりますわね」

お汲は眼を見張って言った。

「この生島という役者はどんな芝居をしたのでしょうか」

「そりゃ、江戸は勿論、京大阪きやうおさかの津つに鳴り響ないた和事師の名人だったのだ。お召し捕りになった時はもう四十近かったらうが、十七、八から売り出してその年までちょっとも人氣が落ちなかったというから大した丹前役者だよ」

「でも今では七十近いおじいさんですわね」

とお汲は何となく気のぬけた声で言った。生島が思いの

外若くないのが気に入らないのである。

「今の公方くほうさまになってから、一度大赦があつて、その時、絵島どのの一件のものは大方御赦免ごじあめんになったのだが、生島だけはゆるされなかった。もつともその時絵島どのも赦免しようという話が出たのだが、身柄を引取る親類がないのでそのままになったということだ。騒動の時から十年余り経っていたが、もうその時にも御老中の女中で絵島どのの名を覚えてゐるものは一人もなかったというものな。もともと謀反人や吉利支丹とは違つて男の世界では大したことはなかつたのだ。それだけに絵島どのも生島も悪い籤くじを引いたというものだ」

四郎五郎と幾野はそれからしばらく、女はよろずに謹しみ深くなくてはならない。夫を持った場合には、夫の家を自分の死にどころと決めて、どんな辛いことでも辛抱し通さなければ女の道に適しているとは言えない。絵島どののような万人に優れた才女で、大奥の束たばねをしたほどの人でも、ちょっとした気のゆるみから、位にも禄にも放れて、こんな山奥に閉じこめられて一生を埋れて過すのが、よいためしだとお汲に教訓するように話した。

お汲ははい、はいとうなずいてきいていたが、床に入つてから一人で今日蓮華寺で見かけた絵島の姿を胸に浮べていると、あの人はまだ若く盛りの年で、美しい縫模様の打掛けを羽織り大勢の奥女中を引連れて人氣ものの丹前役者

と酒盛りしている様子はどんなに華やかだったろうと、そのことばかりがきらびやかな夢を織りなして、かたい木綿夜着にくるまったお汲の若い心をときめかせた。

その晩、偶然叔父や叔母と話しあった絵島の困い屋敷に、お汲が付き女中として行くことになったのは半月ばかりあとのことであつた。

絵島にそれまで従っていた女中が嫁入りすることになつたので、お汲を替りに出してはどうかという話が、内藤家の奥に勤めている桜戸という奥女中から来た。桜戸は四郎五郎の従妹でお部屋様付きの老女であるが、主人のお綾の方が絵島の同情者なので、付き女中の口入れや絵島の衣類手廻りなどの世話は長年桜戸が内々に差配しているのである。絵島は行儀正しく、浮いた風は微塵も見えぬ人柄で、尼僧のような生活をつづけているのだから、お汲のような娘が武士の妻になる前に奉公するには、なまじいの家老の家などよりもよい仕つけが身につくと桜戸は力説した。

「さてどうしたものかな。桜戸どののいうのはその通りに違ひあるまいが、何しろ表向きは科人だからなあ」

と四郎五郎は腕を組んで思案するし、幾野も何となく嫁入り前の姪を配流の女の奉公人にするには望ましくない様子だったが、お汲にその話をすると、断わるかと思つた案に相違して、

「私は御奉公に行きます。あのお方なら御主人として仕え

られると思います」

と思ひ込んでいうので、どうやら話がきまつた。蓮華寺の日成和尚も絵島に宛てた手紙を書いてくれた。

その日は細かい雨が道を濡らして、お城のある高見は濛濛と霧けむっていた。

搦め手御門から武家屋敷のうちつづく坂道を降りて、山畑の妻が霧を含んで濡れているあたりを通りぬけて行くと、細い川が帯のように流れている平地に、板塀が見え、上に忍び返しの上つてあるのがものものしく眺められた。

「あれが絵島どののお困い屋敷です。上へは大公儀への御遠慮で、飾りなど一切はぶいてあるけれども、お部屋様のお肝煎りで、内にはお茶事や生花などなされるように用意してあるのですよ」

桜戸は塗骨の扇を上げて、お汲にさし示した。本式の奉公とも違うのでわざと四郎五郎は附いて来ず、桜戸一人がお汲を案内して来たのである。

家の前まで来ると、湧き出すように蛙の音が前の小川から聞えて来た。桜戸は番所へ通つて番の役人にお汲を連れて来た用向きを言った。

「仔細ござらぬ。お通り下さるようにな……」

日頃お綾の方から心付けられている役人は快く挨拶した。嫁入りで暇を取るといふおしんという女中が出て来て、